



○終業式講話(抜粋) 「気遣い」

令和3年もあとわずかとなりました。今年も新型コロナウイルス感染症に振り回された1年でしたが、悲観するだけでなく、その中でどう生き抜いていくかをそれぞれが考え行動した1年でもあったと思っています。(中略)

先日地域の方から、挨拶の良さについて、お褒めいただくお葉書をいただきました。挨拶は、小さな善行でもあります。他者を気遣う第一歩です。これからも挨拶の励行を心がけていって欲しいと思います。

さて、2学期、2年生の研修旅行がありました。行き先の一つに石見銀山がありました。石見銀山のある大森町には、中村ブレイスという、義肢(義足義手)などをつくっている全国的にも有名な会社があります。本校では校長室だより等で紹介するのみとなりましたが、分校では訪れる機会に恵まれました。中村ブレイスは、大森町の古民家改修などを長年かけておこなって町並みを整備し、若者の雇用だけでなく、移住・定住にも大きく貢献したことで、地域活性化という意味でも有名な会社です。本校のPTA会報で紹介したパラリンピックの車椅子テニスに出場した三木選手も、この会社のサポートを受けています。会社を訪れた際に、生徒からの質問に答える形で話された中村社長の話がとても印象的だったのでここで紹介します。

質問は、「中村ブレイスで働く上で大切なことは何ですか」というものでした。「手先が器用で、障がい者福祉に関心があること」と回答されると私は思ったのですが違いました。社長は、「ものづくりに興味があればもちろんいいが、大事なのはコミュニケーション力。患者さんに心から寄り添って話を聞き、丹念にやりとりしながら、体の一部となる義肢を本当に患者さんが納得できるものに仕上げていこうとする患者さんへの思いや使命感」という内容の回答でした。手先が器用かどうかよりも、そこに思いがなければだめなのだと思います。料理も同じで、料理が好きで包丁使いが上手でも、食材や食べる人への思いがなければいい料理は作れません。勉強ができて、スポーツが得意でも、そこに思いがなければ、志がなければ自己実現にはつながっていきません。そのことをあらためて思いました。中村ブレイスの主な仕事先は、出雲や松江、遠くは米子や広島にある病院です。地域活性化のためにあえて仕事先には遠い大森町に会社があります。患者さんとの物理的な距離よりも、心理的な距離がとても大事だと思っているからこそ、大森町で会社がやっていると社長のお話からもわかりました。

仕事には相手があります。工場での仕事であっても、その先に製品を手にする消費者がいるし、働く仲間がいます。人の役に立たない仕事はないと思っています。直接的か間接的かの違いだけです。だからこそ、仕事でもなんでも他者を気遣う気持ちを持つことは大事です。これは学校生活でも同じです。

合い言葉を「小さな挑戦、小さな善行、確かな(大きな)志」としました。相手や仲間を気遣うことが善行でもあります。照れくさい時もありますが、小さな勇気、挑戦で相手を気遣えばお互いが幸せな気持ちになります。その時もらえる感謝の言葉は、自分の進むエネルギーにもなります。3K つまり、感動、感謝、気遣い…という言葉で、校長室だよりなどでこしたことを話したこともあったと思います。相手を気遣うことは自分の成長にもつながります。年末年始で人と会う機会が多い中、人とのつながりを大事にしていくことに思いを寄せてみましょう。(後略)